

香川県坂出市府中町所在

# 讃岐国府跡の発掘調査

調査地

平成27年2月15日 香川県埋蔵文化財センター



▲ 建物群の北側を区切る溝2から出土した土器 (平安時代 約1,200年前)



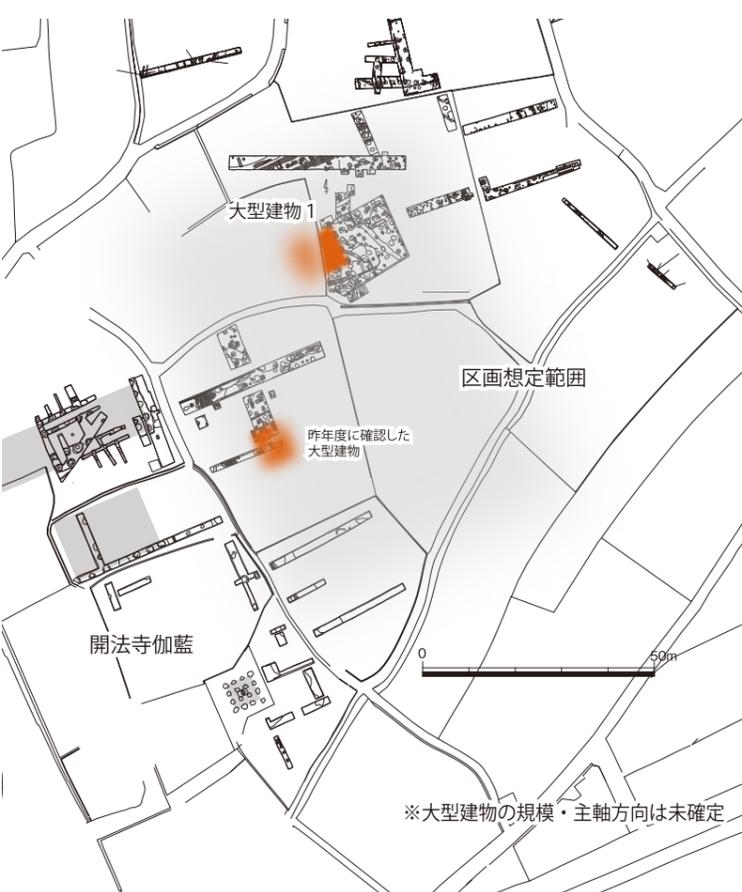
▲ 甕を埋納した遺構 (平安時代 約1,200年前)

大・中・小の土師器の甕を立てて埋めています。調査途中で中に何が入られたのかは分かっていませんが、建物を建てる際に、地鎮などの儀式が行われた可能性があります。



◀ 建物群(区画)がつくられた微高地の東側斜面と低地 (奈良時代～平安時代 約1,300～900年前)

河川の影響で奈良時代まで低湿地であった場所を、平安時代の中頃から終りに埋め立てています。時代が新しくなるにつれて、自然地形を改変し建物を建てること可能な平坦面をつくりだしています。



## 3 まとめ

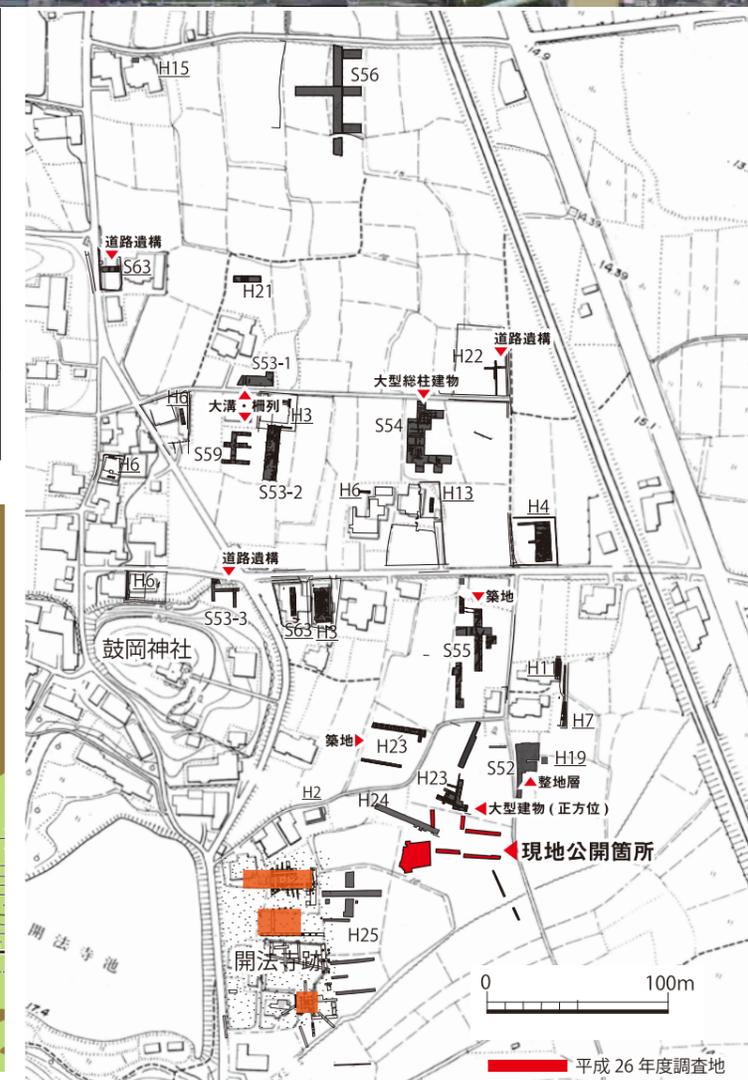
今回の発掘調査では、建物群を取り囲む区画施設は部分的にしか確認できませんでしたが、平安時代の大型建物を含む複数の建物群を検出するなど、大きな成果がありました。現時点で大型建物1の主軸が南北方向か東西方向なのかを明らかにすることはできませんが、約3m(10尺)を測る柱間からみて、開法寺伽藍東側の区画内部の建物群の中でも格式をもった大型建物となる可能性もっています。昨年度の調査で確認された大型建物を含め全体での建物配置を把握することができれば、現在調査を進めているエリアが讃岐国府の中でどのような位置付けの施設であったのかが明らかになるといえます。



▲ 讃岐国府の位置



▲ 讃岐国府周辺の歴史的環境



▲ 讃岐国府跡における発掘調査地点  
坂出市都市計画図1/2500を62%に縮小

## 1 讃岐国府とは

国府とは、奈良時代(約1300年前)の古代国家の成立とともに、地方統治の中心として国ごとに置かれた役所で、現在の都道府県庁のような施設です。讃岐国府は、奈良時代から鎌倉時代(約700年前)にかけて機能し、菅原道真(845～903年)が国府の長官である讃岐守を勤め、崇徳上皇(1119～1164)が晩年を過ごしたことで有名です。

国府は、都や国内の郡衙との連絡がとれるように交通の要衝に設置される事例が多く、讃岐国府も付近に官道の南海道が東西に通じ、瀬戸内海と綾川を介して約4kmで繋がるなど、陸・水上交通の接点となる場所に営まれています。また、周辺に建立された讃岐国分寺・国分尼寺などとともに、讃岐国の中心となる地域を形成していました。

- 政庁 せいちょう(国庁 国くちょう)・・・国府の中でも中枢となる施設で、儀式や政務の場
- 国衙 国くが・・・国庁や行政実務を行う曹司などの諸施設群の総称
- 国府 国くふ・・・国衙や国司の宿舎である国司館、市などが営まれた地区全体の総称



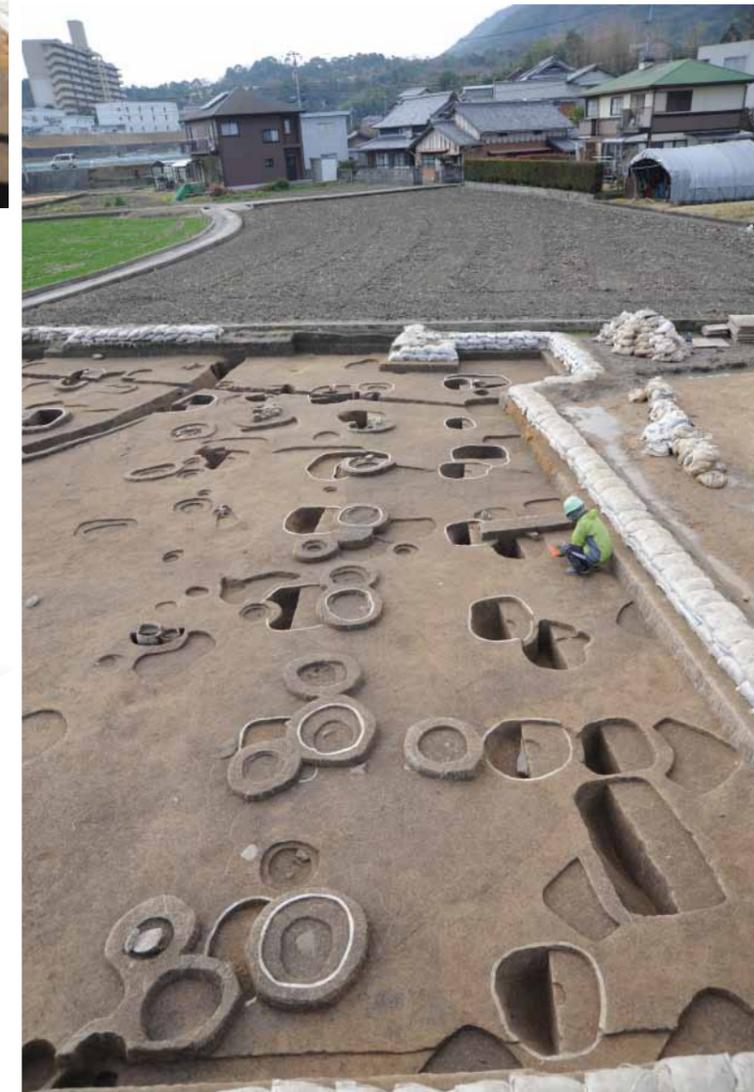
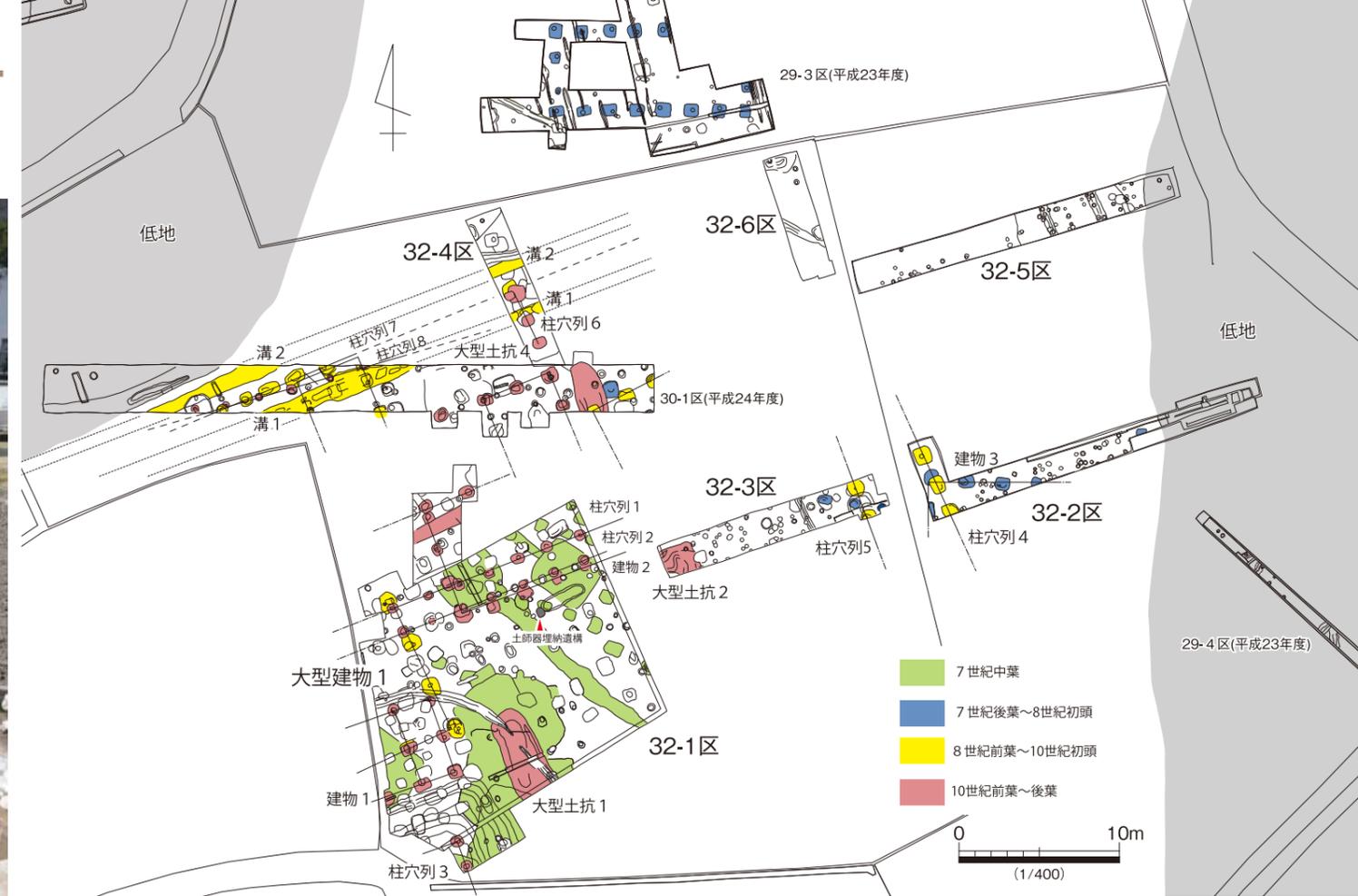
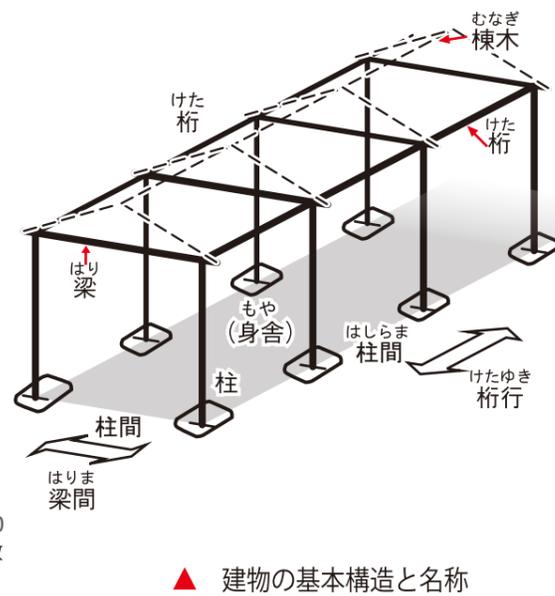
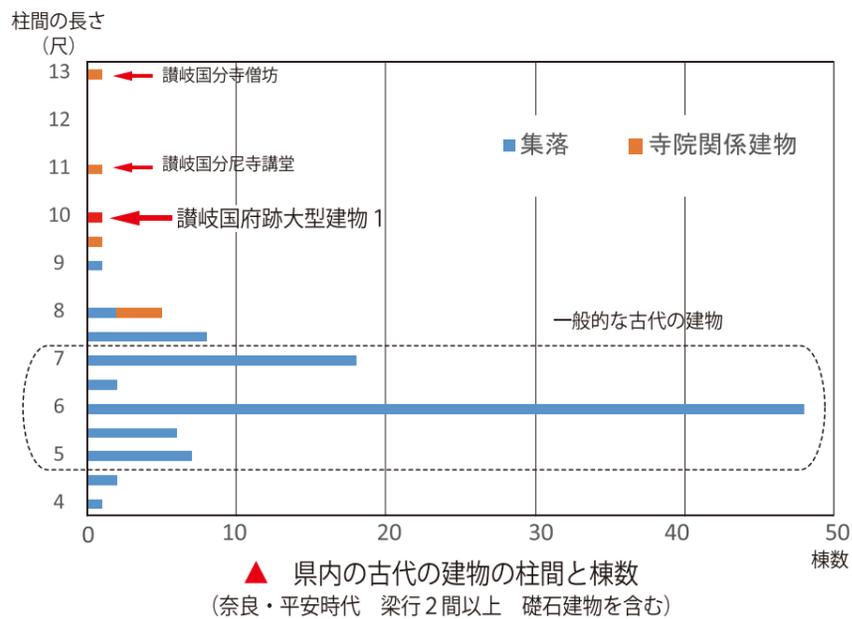
## 2 調査の成果

今回の発掘調査では、飛鳥時代（7世紀中葉）から平安時代の終わり（12世紀）までの遺構が重なり合っており見つかりました。周辺のこれまでの調査成果とも合わせ、調査地周辺に展開する微高地は、長期間にわたる活動をうかがわせる重要なエリアであることがわかりました。中でも平安時代の大型建物1は、国府に関する遺構として注目されます。



▲ 大型建物1（平安時代 約1,150～1,100年前）

柱を据える穴（柱穴）は、一辺が約1.2mと大きく、柱と柱の間隔（柱間）が約3m(10尺)あります。建物規模や主軸方向は今後の課題ですが、柱間が長いほど上部に架けられる梁や桁などの真っ直ぐで長い水平材が必要となることから、格式のある大型建物になることが想定できます。このような柱間が3m(10尺)ある大型建物は、国分寺や国分尼寺などの中心寺院を除いて、県内の類例がなく、讃岐国府跡でも初めてであり、調査地周辺に想定される区画の中でも中心建物となる可能性があります。



▲ 火災の廃材を埋めた穴 大型土坑1  
(平安時代 約1,100年前)

周辺の建物が焼け落ちた際、廃材や瓦、土器を捨てるために掘られた大きな穴で、元の建物がない場所につくられています。

◀ 建物2・柱穴列1・2(平安時代 約1,100年前)

大型建物1が廃絶し、やや場所を変えて建物2が建てられたあと、柱穴列1・2が建てられています。建物2は、柱間が約2.1m(7尺)の東西棟です。柱穴列1・2は建物か柵(塀)と考えられます。